

南部エリア

## 常国寺と一乗山城 拝観に良く、登山に楽しく

常国寺は、熊野盆地の東南部にあります。文明年間（1469年～1486年）に日親上人の開基により、一乗山城主の渡辺越中守兼が、菩提寺として創建したと伝えられる日蓮宗の寺院です。熊野地方の住民全員を日蓮宗徒にし、また他宗の寺院も転宗させて、常国寺の末寺としました。大寺らしく境内も広大です。



熊野水源地からのぞむ  
左の小山が一乗山城、別名黒木城と呼ばれています

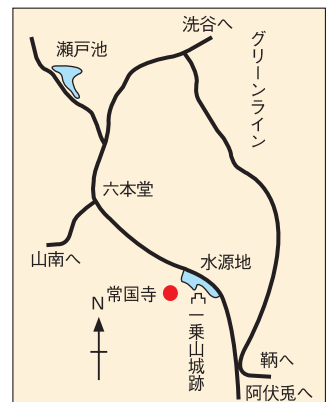
石段を上がると、総けやき造りで本瓦葺の唐門が立っています。どの部分

とも、精巧な造りで意匠が優れています。中でも、鏡板の桐文薄肉彫りは見事な出来栄です。1576年（天正4年）、室町幕府の最後の将軍、足利義昭は、織田信長によって京都を追われ、鞆などに11年間滞在しました。渡辺氏は、かつて足利氏の家臣であった旧縁もあり、将軍の警固と接待役を務めました。こうした事情から、足利氏の家紋の桐の文様を唐門に彫刻したものといわれており、この唐門とその他鐘楼や番神社は市重要文化財に指定されています。



常国寺の境内  
シーンと静まりかえった境内にたたずむと、長い歴史の重みを感じます

常国寺の背後に、渡辺氏が築いた一乗山城があります。標高240mの尾根が突出した部分を平らに削って平坦



面を設けています。この頂上からは、眼下に鞆と今津を結ぶ江戸期以前の街道や熊野一帯が眺望できて、絶景です。南側の尾根は何段にも堀切をしていて、歩行による侵入を防いでいます。北側は、急傾斜で堅堀（かきほり）していて、城に登る道を細く険しくしています。登る途中、平坦面がありますが、これは郭（くわ）といい、石垣もよく残っています。山の斜面を横掘りした井戸は水を湛（た）えています。守るに易く、攻めるに難しい中世の代表的な山城で、市史跡に指定されています。

閑静な常国寺を拝観するも良く、一乗山の登山も楽しく、熊野の水源地の景観は美しく、ハイキングコースとして、市民に親しまれています。

（1993年7月号に掲載）

## はねおどり 大地を踏みしめ力強く

はねおどりは、備後福山地方の雨ごい、五穀豊穡じょうじやくの祈願と感謝の踊りとして伝承されてきたもので、今でも市内のあちこちに残っています。中でも田尻のはねおどりは古い形をよく残しており、八幡神社のお祭や虫送り（稲の害虫を追い払うための祭礼）などで定期的に踊られています。

踊りの起源は不明ですが、福山藩主水野勝成がはねおどりを見て、士気を



藤井松林「福山はねおどり図」  
躍動感あふれるこの絵は、1852年（嘉永5年）に福山藩御絵師の藤井松林によって描かれました

奮い立たせるのにふさわしいと、鉦かねと太鼓を与えて奨励したので一層盛んになったといわれています。

沼隈郡中山南には、はねおどりに使われた「享保十五年戊戌十月十五日」（1730年）銘の鉦と「安政四年丁巳六月」（1857年）銘の大胴おほむち（大太鼓）が今も残っています。

江戸末期の画家、山口素徇そじゆんや藤井松林もはねおどりを描いています。その絵を現在の田尻のはねおどりと比べると、踊りの形、楽器の種類、服装などほとんど同じです。また、1819年（文政2年）菅茶山かんちやせんが編集した年中行事記録『御問状答書』に「雨乞あまごは、八



田尻町のはねおどり  
上の絵と比べて服装など同じ点が多いことに気が付きます。祖先が祈りを込めて舞った踊りが、形をほとんど変えず、現在に受け継がれています

幡宮あふ或は龍王社に百姓群集し…鉦太鼓の拍子にあわせ踊り候」というのはねおどりの記述があります。この内容も田尻のものにあてはまります。

このように、田尻のはねおどりは江戸時代後期の古い形を残しており、広島県無形民俗文化財に指定されています。

田尻のはねおどりは楽器に、大胴、入鼓いれこ（小太鼓）、鉦が使われます。どこかユーモラスな面をつけた鬼が、浴衣に玉襷たまたすき、下は股引ももひき、白足袋あしひらきに草鞋わらじという軽装の踊り子たちを指揮し、12種の踊りを進めます。後半は、全員が楽器を打ち鳴らし、跳ね舞う豪快な踊りになります。

8月14日午後7時から田尻町の高島小学校で催される精霊祭しょうりょうさいで、はねおどりが披露されます。素朴ですが、収穫を願う心が力強い踊りの中に込められています。

（1994年8月号に掲載）

## 沼名前神社の石造物 特色ある石の建造物

沼名前神社は、鞆町の西方の山麓に位置します。大綿津見命をまつり、海上安全の信仰を集めた渡守神社と、須佐之男命をまつり、無病息災を祈願する祇園社をまつる神社です。

この神社の参道には、珍しい形の石鳥居があります。普通は、明神鳥居と呼ばれる形ですが、上部の笠木の形が変わっています。笠木の先端が丸味を帯びて、そり上がり、その上に鳥が止まっているように見えます。鳥が止まるといわれるもので、このような形の鳥居を鳥ぶすま形鳥居と呼びます。



沼名前神社鳥居  
鳥ぶすまがついたこの鳥居は石柱も細く長身で、大変珍しいものです

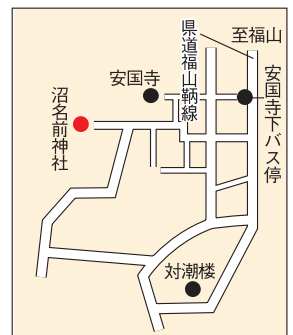
鳥居の石柱は細身で、高さは4.5mもあり、全体的にとっても華麗です。柱の刻銘から、水野二代勝重（後の勝俊）が寛永二年（1625年）に長男の勝貞の誕生にあたり「病をことごとくとりぞくことを願望」して、当社に寄進したことが分かります。また、左の柱に「大工 肥前之住人 中島弥兵衛」、右の柱に「大工 豫州之住人 左兵衛尉」と刻んであり、肥前（佐賀県）豫州（愛媛県）の大工が製作したことが分かります。沼名前神社鳥居は、1957年（昭和32年）に県の重要文化財に指定されています。

さらに参道が上がると、隨身門の前には、石造りの狛犬があります。それから、巨大な長方形の石段の両側に、



社殿へ続く石段  
石段両側の玉垣には、季節風を利用し、大阪・北海道間で商売をした北前船の名前も見られます

石造りの常夜灯と玉垣がずらりと立ち並んでいます。玉垣には、江戸時代の商船名などが刻まれていて、この神社が海上安全の信仰を集めたものであることが分かります。



最上段の社殿前には、荘重な造りの石灯籠が一对建っています。慶安四年（1651年）水野三代勝貞によって寄進されました。六角形の台座に、直径47・4cmの柱を建て、その上に六角形の中座、火袋、笠石、宝珠をのせ、高さが3・24mの石灯籠です。この一对の石灯籠は、江戸時代初期に社前に献上され、形式、手法とも、標本的なものであると評価されており、市の重要文化財に指定されています。

沼名前神社では、いろいろな石造物を見ることが出来ます。

（1994年9月号に掲載）

## 津之郷のひんよう踊り 幻想の世界へ

宵闇よひぐらにキリコの火が揺らぎ、幻想的な雰囲気ふんぎを醸し出す『津之郷惣堂のひんよう踊り』は、昭和54年（1979年）福山市の重要無形民俗文化財に指定されました。この踊りは一名『花踊り』とも称され、旧沼隈郡内の各地に伝承されてきました。

その起源は、江戸時代以前にさかのぼるともいわれますが定かではなく、文化15年（1818年）の『御問状答書』ごもんじょうとうしよに記述があることから、江戸末期には盛んに踊られていたようです。



キリコを頭にのせた子どもたちも一緒に輪を作り、素朴な踊りが繰り返されます

10月の第2日曜日は津之郷の秋祭で、『ひんよう』はその前夜祭に、惣堂神社で踊られます。弓張提灯ゆんぱんていとうを中心に、踊り手が二重の輪を作り、音頭とりら8人が「ヒンヨウ」と唱えながら、輪に加わると「名所」の踊りが始まりです。ゆったりしたテンポの音頭に合わせ、緩やかな動きの素朴な踊りが繰り返され、「ヒンヨウサー」と合いの手が入ります。

太鼓打ちもキリコの踊り子も小学生の受け持ちです。キリコは桐の木を骨組みにした行灯あんどんで、絵を描いた和紙を貼り、梅桜の造花で飾って頭に戴かぶきます。キリコに灯ともされた蝋燭ろうそくのほのかな明かりが、拍子に合わせて右に左に揺れ、太鼓の音が夜のしじまを震わせ



踊りに入る前の状況



ます。

もつとも、先に挙げた『御問状答書』には「月見の事」として載せてあり、本来は中秋の祭に踊られたことがわかります。もともと旧暦8月十五夜は、大切な神祭の節目で初穂祭が行われ、練習始めの八朔はつさく（旧暦8月1日）には、豊作を期待する習俗が伝わることから、『ひんよう』は農耕儀礼と深くかわる踊りだったことがうかがえます。

中秋に近い旧暦8月13日にも、津之郷町の高木神社で『ひんよう踊り』が奉納されます。十三夜の月に照らし出されて、踏歌しょうかを思わせる踊りの輪が影のように揺れ、見る者を幻想の世界へ誘ってくれることでしょう。

（1995年8月号に掲載）

# 県史跡 田辺寺塔跡

でんべいじ

## 古代の繁栄をしのぶ

本谷川に沿って、津之郷小学校までのぼり、左折して小橋を渡って行くと、田辺寺という真言宗の寺院があります。昭和9年に門前の畑より、風鐸（仏堂や塔などの軒の四隅などに吊り下げた青銅製鐘形の鈴）・古瓦などが発見され、沼隈郡教育会国史委員会により発掘調査が行われました。

その結果、出土古瓦はすべて布目瓦で、地方色の濃い唐草文様の軒瓦であり、さらに、塔の九輪（塔の屋頂につ



塔の中心礎石  
礎石の中心や側面には長い年月を感じさせる穴や溝があります

ける相輪の一つでその中心的な部分）の破片や風鐸の破片などが出土し、奈良時代ごろまでさかのぼると思われる塔の存在が確認されました。

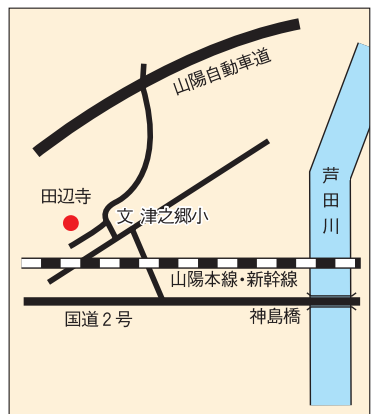
そこで昭和18年3月田辺寺前面の畑は県史跡に、また、出土遺物のうち風鐸片3点、九輪片3点、中心礎石1個は県重文に指定されました。

しかし、塔の中心礎石は移動しており、他の礎石も、すべて抜き取られているため、位置の確認ができず、伽藍配置などは判明していません。

寺の伝承では、奈良時代の養老5年（721年）の開基とあります。はじめ、和光寺と称していましたが、永禄年中（1558〜1570）に、時の津之郷串山城主田辺越前守光吉が、廃寺を再興し、菩提寺として以来、田辺寺と呼ぶようになり、現在にいたって



全体的に、流麗で風格のある毘沙門天像



います（『西備名区』より）。

なお、田辺寺に伝わる毘沙門天像は、像高114cmの一木造りで、藤原期（平安時代初期）の優作として、県重文に指定されています。また、津之郷は、古く弥生時代から大陸との交流もあった港と考えられ、津（港）の郷（里）ができて人家も多く、集落が形成されてきたという歴史的背景を考え合わせると、古代に栄えた寺院の存在が、一段と現実的になってきます。

現在、塔の中心礎石は、境内に保存されており、長方形の自然石に掘られたほぞ穴やその両側に彫られた溝に長い年月の風化が見られ、歴史の重みを感じさせてくれます。

（1995年9月号に掲載）

## 地蔵院 十一面観音立像 めずらしく歯を見せて

靱港に沿って県道が通り、その中央部に真言宗の鶴林山地蔵院があります。城郭の石垣で囲まれ、石段にも風格があります。石垣には△、◎印の刻印が数多く刻まれています。これは、戦国時代や江戸初期のころ、ここに海城といわれる靱城の南大手門があり、その石垣であったことを示しています。しかし、靱城は、1615年の一国一城令によって廃城になりました。

地蔵院は、寛文年間（1661〜1672年）にここに移り開創されました。本尊は地蔵菩薩像（市重要文化財）で、室町時代中期の優作ですが、秘仏



十一面観音立像、不動明王（右）、毘沙門天（左）の三尊像

になっていきます。応永15年（1408年）、省眞法師によって再興されたという寺伝と地蔵菩薩像の造像年代は相応しています。

石段を上り、山門をくぐると、静かな境内に入ります。巨大なソテツのある庭は、一見の価値があります。

地蔵院は、靱の古寺めぐりの寺院で、本堂が上がって拝観でき、本堂には木造十一面観音立像が安置されています。十一面観音は、十一面観世音菩薩の略で、慈悲にあふれ、悩みや苦しみを救済すると信仰されてきました。古寺めぐりでは、金剛健齒観音として、歯の健康加護に御利益があると親しまれています。

立像は全体的に写実的で、特に天衣や手足などにその特徴が出ています。右足は半歩踏み出し、観音様自らが人間の救済のため、のり出した姿です。両玉眼は慈愛の微笑を浮かべ、わずかに



趣を持った構えの地蔵院の石段

に口を開き、上歯4本をのぞかせています。

「仏が微笑をもたらし、口から無数の光を出す」形を表現し造像した仏像は、ほかに阿弥陀如来像があり、全国で20体ほど発見されています。「唇開き歯白く見ゆるゆえ、歯吹仏とよべり」（『武蔵風土記稿』）と説かれ、歯吹如来といわれています。

しかし、この地蔵院の十一面観世音菩薩立像をのぞいて、観音像の歯吹仏は発見されていません。歯吹観音といってもいいでしょう。これは、室町時代の作で、県重要文化財にも指定されています。

また、この観音立像は、不動明王と毘沙門天を脇侍として配し、三尊像になっています。

（1995年11月号に掲載）



# 田尻の民俗

## 先人の知恵とぬくもりが

芦田川西岸の県道福山鞆線を南に下り、水呑町をぬけて「さいの峠」を越えると、視界が開け、仙酔島が浮かぶ瀬戸内海と山裾に広がる家並が目に飛びこんできます。ここが田尻町です。西は熊ヶ峰の急峻な丘陵を背に、東から南は燧灘に面しています。北には山に囲まれたなだらかな平野が見られますが、これは古山田川によって作られた沖積平野です。

このように、山あり、川あり、平野あり、海ありといった恵まれた風土によって、田尻の民俗は育まれました。

田尻民俗資料館



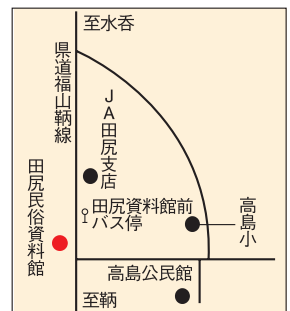
農業と漁業が主な産業で、副業として、織物、畳表などの生産や、養蚕も広く行われていました。漁業は遠浅を利用した沿岸漁業、農業は米、麦が中心で、カボチャとアンズは特産品としてよく知られていました。

昭和初期まで続いたこのような半農半漁の生活も、昭和30年代からの高度経済成長期には、生産用具と生活様式が大きく変わり、機械化、近代化とともに人々の生活を支えてきた民具は、次第に姿を消していきました。

こうした中で「祖先の生活と心・歴史と文化遺産に学ぼう」と1971年に田尻民俗資料保存会が発足し、姿を消そうとする民具の収集、保存活動が始まりました。町ぐるみの運動により約2千点という多くの資料が収集されましたが、それは数だけでなく体系的、包括的なものもあり、かつての生産様式をそのまま再現できるものでした。



オシアゲ  
資料館の漁具の中では最も古いもので、柄の長さは213cmあります



収集資料の一つ、磯具のオシアゲは、干潮時、腰まで海に入り、海泥や海草中のエビ、シヤコ、ハゼ、カレイなどを取るのに使用されたものです。海中を押し、最後に浜に押し上げられたのでこの名があります。農業のかたわら、磯に行き副食として小魚を捕っていた当時の生活がしのべれます。

収集資料の内1,022点は、1976年に広島県有形民俗文化財に指定されました。現在、田尻民俗資料館で保管・公開されており、訪れる人に先人の知恵とぬくもりを伝えていきます。

- ・ 田尻民俗資料館の開館日 毎週日曜日 午前9時～午後4時
- ・ 連絡先 高島公民館 (☎084・956・0219)

(1995年12月号に掲載)



## グリーンラインの歌碑 瀬戸内海を見つめて

グリーンラインの展望台から、燧灘が一望できます。日の出を眺めると、太陽は海の底から昇ってくるようです。東側には、仙酔島・弁天島・走島が眼下に見えます。遠くには岡山県の神島・白石島・北木島・真鍋島・大飛島・小飛島・六島が列をなし、眺望できます。西側は、沼隈町の阿伏兔の瀬戸に田島が影を落としていて、水面の緑が鮮やかです。そして、遠く四国連山を望むことができます。展望台には、海に向かって万葉の歌碑が建っています。



海人小船の歌碑

「海人小船 帆かも張連る登と  
美る萬で二 鞆のうらみに  
波たてり見逝

万葉集より笹舟筆

福山市名誉市民の書家、故桑田笹舟氏（1900～1989年）の書によるもので、昭和52年（1977年）に建立されました。和歌は読み人知らずといわれています。「小さな漁船が、笹帆を張っているように、その白帆のように、鞆の浦の円形の曲がりくねった岩辺に打ちよせる白波がたっています」という意味です。

もう一つ歌碑が建っています。

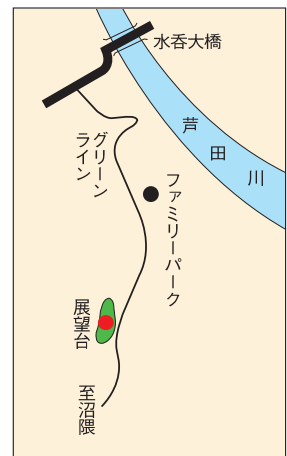
「鞆の津の 沖ゆく帆あり

明易き 秋櫻子

昭和41年（1966年）に、福山馬酔木俳句会と市との共同で建立されました。「昭和34年鞆を訪れた時、明



鞆の津の歌碑



け方の美しい海に帆船が沢山浮かんでるだが、強く印象に残って：作ったものである」と句碑除幕式の謝辞で作者の秋櫻子は述べています。また、初夏には午前4時を過ぎると夜が早々と明けます。「明易き」とは、そんな意味を示しており、夏の季語になっています。

句碑の書も水原秋櫻子によるものです。秋櫻子（1892～1981年）は「馬酔木」を主宰した俳人で、俳諧史の著書も数多くあり、句碑は全国各地にあります。しかし、「おだやかな海を見おろすところといえば、はじめの場所である」とその後、この地のことを秋櫻子は述懐しています。

二つの歌碑は、この地から四季折々の海を眺めています。

（1996年1月号に掲載）

# 安国寺釈迦堂

## 禅宗様を伝える仏殿

軀の安国寺釈迦堂は、創建より長い歲月、変転する時代を乗り越え、禅宗様式を今に伝える建物です。

構造形式は、方三間の入母屋造りです。本瓦葺、単層の仏殿です。

禅宗様は、鎌倉時代に禅宗の伝来に伴って、中国から輸入された様式です。

正面から全体を眺めると、他の仏殿が周辺に裳階を設けて、一見重層風です。すつきり高く感じさせるのに対して、



▶ 落ち着きのあるどっしりした構えの釈迦堂正面



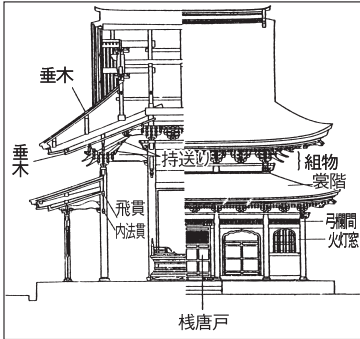
◀ 内部 同じ形の組物が並ぶ

この仏殿には裳階がなく、どちらかといえどっしりとした重量感を与えます。また、禅宗様の代名詞ともいいうべき火灯窓が、正面の両脇間にあります。

反面、禅宗様の特徴として、組物は柱上だけでなく、中間にも同形のもの置き（詰組）、ビッシリと並べて、軒まわりが非常ににぎやかです。そして、内法貫と飛貫の間を、湾曲した組子の波欄間（弓欄間）で飾り、棧唐戸の格子とあいまって、細くてやさしく軽快です。

内部に入ると、床は、四半瓦を敷いた土間になっています。靴を脱いで、本堂に上がる他宗派の感覚からすると、違和感を覚えます。内部空間は、平面の広さに比べると、天井が高くて立体

各部の名称



感があり、ドームのように高い中央部は鏡天井（一面に板を張る）になっています。しかし、そのほかの天井部分は、垂木を見せた化粧屋根裏ではなく、縦板張りとなっていて変わった手法を用いています。

内部架構は、禅宗様建築の一番の見えるところで、太い梁組に対して、小さな部材を集合させた組物の量感が、互いに競い合っている様は、闊達、華麗です。また、持送りの線形（彫刻）や、太瓶束の結綿（下部の彫刻）も一見の価値があり、じっくりと眺めていると、悠久の歴史に吸い込まれていくような、時間の経つのも忘れず。

このように、安国寺釈迦堂は、全国的にも貴重な禅宗様建築であり、国の重要文化財に指定されています。

（1999年2月号に掲載）

## 鞆の津の商家

### 美しい家並みを今に残して

鞆港を囲むように県道が走っています。その県道沿いの町の中央部に小さな坂道があり、坂ノ上<sup>ノ</sup>に商家の建物がああります。鞆の浦歴史民俗資料館と福禅寺・対潮楼を結ぶ線の中ほどにあたります。

16世紀末の戦国時代から江戸初期に存在した鞆城は、資料館から福禅寺・対潮楼に続く丘陵全体が縄張りでした。この商家の位置は、かつての鞆城の一角であったと推定されます。

建物は主屋と土蔵で成り立っており、



明治中頃の写真。活気ある様子がうかがえます

豪壮な風情をとどめています。「港町・

鞆の津において」、「近世的町家の典型」、

「前室開放型通り土間住宅」であり

「18世紀末の貴重な建造物」であると

評価されています。（『近世の遺構を通して見る中世の居住に関する研究』東

京大学稲垣研究室より）

主屋は江戸末期の建築で、内部は通

り庭形式の三間取りになっています。

入り口の「店の間」は店舗であり、板

敷きにして商品を陳列し、板戸、<sup>しどろ</sup>板

戸などを開放していました。そこから

「中ノ間」、「奥ノ間」と続き、「通り

土間」に面しては縁<sup>えん</sup>を付けています。

以前は離れ座敷と家財入れ土蔵があり

ましたが、現在は公衆トイレなどに

なっています。また隣接する土蔵は登



鞆の歴史的町並の一つ



り梁造りになっていて、江戸末期の建物です。これらの建物は、現在『鞆の津の商家』として、市重要文化財に指定されています。

かつて江戸から明治初期までは、船具店、そして呉服の商家でしたが、明治27年「鞆製網合資会社」になりました。書類に「百般ノ漁網ヲ製造シ及ヒ漁具船具ヲ売買シ時宜ニヨリ漁業ニ従事ス」と会社の目的を記しています。

その関係書類は資料館で保管されています。その後戦前にかけては、漁具や船具類を北海道から東アジア、東南アジアまでの広範囲に販売していました。現在は、資料館の大型資料の収蔵庫として活用されています。

鞆の代表的な家並みの一つで、その外観の美しさは、日曜画家の画題になっています。

（1996年2月号に掲載）

## 靱城跡石垣

### 朝鮮通信使も見た海城

1992年、靱町江之浦の工事現場で、東西幅約6m、高さ2.5m、東端が南に約1.7m突き出した石垣列が見つかりました。石材は花崗岩で、石の角を槌でたたき平らにして組み合わせる打込はぎという手法で積み上げ、内側に栗石を詰めた堅固な造りでした。この石垣列はさらに東西に延びていると思われ、石の表面からは「回」と「大三寸」の刻印も確認されました。

この石垣から北へ約42mの地点にある地藏院の石垣にも、同様の刻印が見られます。これは、調査の結果、靱城



市史跡靱城跡

二ノ丸の石垣であることが判明しているため、新たに確認した石垣は、港に面する海城であった靱城三ノ丸の石垣と推定されました。

現在資料館が建っている城山の山頂が靱城の本丸で、この本丸を中心に階段状に二ノ丸、三ノ丸を築いています。対潮楼の石垣にも同様の刻印が見られることから、縄張りの東端は城山からさらに東に延び、尾根続きにある対潮楼を取り巻いていたと考えられます。

元禄年間（1688年～1703年）の古絵図を見ると、沼名前神社参道の南まで広がる約100m四方の広大な土地が「御屋敷」と記され、周囲が堀で囲まれています。この堀で囲まれた範囲が北の三ノ丸の縄張りと考えられます。



毛利時代の本丸の石垣(野面積み)



なお、1607年（慶長12年）の朝鮮通信使の日記『海槎録』には「崖の上に新しく石城を築き砦のようだが、まだ未完成である」という記述があり、福島正則が靱城を改築した年代が確認できます。

ところで、靱城跡の石垣を巡ると、自然石を積み上げた野面積みと呼ばれる慶長以前の石垣が所々に残っています。おそらく、毛利氏による築城と思われるかもしれませんが、この時期の石垣は部分的にしか残っていないため、その規模については不明です。

これまでは、地藏院の石垣が、靱城南西端の縄張りと考えられていただけに、さらに南から三ノ丸の石垣が出てきたことは、今後靱城の縄張りを考える上で大変貴重な発見といえます。

（1997年7月号に掲載）

## 太田家住宅 旧保命酒屋の遺構

鞆港の中央に立つ常夜燈のすぐ北に、幕末の政変によって長州に下った三条実美ら7人の尊皇攘夷派公卿が立ち寄った鞆七卿落遺跡（県史跡）として知られている『旧保命酒屋』があります。

ここには、江戸中期から明治初期にかけて、保命酒などの各種の酒類醸造で栄えた商家と、その別宅が残されています。

母屋を中核に、炊事場、西蔵、釜屋、南保命酒蔵、北保命酒蔵、東保命酒蔵、北土蔵、新蔵などが当時の構えを良く残していることから、一連の建物は『太田家住宅』・『太田家住宅朝宗亭』と

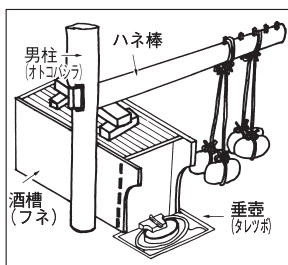


カマドの遺構  
(左側が酒米を蒸すカマド、  
右側は湯沸用)

して、1991年に国の重要文化財に指定されました。

長年の風雪によって老朽化が進んだため、現在1995年度から6年計画で建物の解体修理工事が行われていますが、これに伴って1996年度と1997年度に、地下に埋もれている酒蔵跡・釜屋跡などの発掘調査が行われました。

この酒蔵で造られていた保命酒は、焼酎製の漢方薬酒で、1659年（万治2年）に中村吉兵衛吉長が薬法をもとに醸造を開始したといわれています。薬の種類や配合量などの製法は門外不出とされ、江戸時代には『保命酒屋』（旧中村家）が醸造販売権を独占していました。このため、当時行われていた保命酒造りの実態については文献がとぼしく、現在行われている酒造りの行程を参考に発掘調査を進めました。その結果、



酒をしぼる道具

北保命酒蔵から酒をしぼる酒槽（フネ）のハネ棒を固定するため男柱を埋



めた直径約3m、深さ1.7mと直径2.5m、深さ1.7mの穴が2か所見つかりました。また、釜屋からは酒造り特有の掘り込み式の焚き口をこしらえたカマドが3か所見つかりました。このうち、酒米を蒸すカマドは直径約1.36mで、火床には一面に石が敷かれ、中央には幅40cm、深さ20cm、長さ1.25mの灰出し溝が焚き口に向かって設けられていました。

1799年（寛政11年）に、木村孔恭によって著された「日本山海名産図絵」には、江戸時代に伊丹地方で行われていた酒造りの様子が生き生きと描かれています。この酒蔵の発掘調査によって、鞆の名産として名高い保命酒製造の歴史がしだいに明らかにされるようとしています。

（1997年10月号に掲載）

## 津之郷町周辺の古墳 津を背景に栄えた地域

平安時代中頃に成立した『和名抄』には「津宇郷」「赤坂郷」の郷名がみえ、平城宮からは「備後国沼隈郡赤坂郷中男黒葛十斤」と書かれた木簡が出土しています。津宇郷は津之郷町を中心とした地域で、古来港として栄えたための地名でしょう。

このように、津之郷町周辺は古い歴史をもっていますが、これから紹介する古墳群の存在により、その歴史は、さらにさかのぼることになります。

この地域で確認された最も古い古墳は、5世紀前半と考えられる内水越古墳群で、箱式石棺を内部主体とする古



坂部4号古墳  
石室の中には小さな社が祭られています

墳が4基あります。武器や農具などの鉄器が出土しており、その内13点は市重要文化財に指定されています。

市史跡イコーカ山古墳は、内部主体や墳丘の規模は不明ですが、円筒埴輪が二重に巡っているともいわれ、5世紀代の築造と思われます。

その後、6世紀後半になると、この地域でも横穴式石室を持つ古墳の数が急激に増えていきます。津之郷町の本谷古墳群、坂部古墳群、赤坂町のスベリ岩古墳などが代表的なものです。

その内、本谷1号古墳・坂部4号古墳は市の史跡に指定されています。墳丘はほとんど失われていますが、石室はどちらも玄室と羨道の区別がない無袖式で、全長が8m以上あります。本谷1号古墳からは、銀環、勾玉、須恵器などが出土しています。



スベリ岩1号古墳  
津之郷周辺では最大規模の横穴式石室を有する後期古墳です



スベリ岩1号古墳も市の史跡で、墳丘の残りが比較的良く、径13mの円墳と考えられます。玄室の幅が2mに対して羨道は1.5mと狭くなる片袖式で、石室の全長は9m以上と、この地域では最大の規模を誇ります。

なお、山陽自動車道建設に伴う調査では、粘土槨をもつ5世紀前半の古墳や、陶棺の破片が出土した7世紀末の古墳も確認されました。

その他、消滅した古墳もたくさんありますし、弥生時代の遺跡も明らかにありつつあります。これらの遺跡は、津を背景に、多くの人々がこの地域に住みつき、盛んな生産活動を繰り広げていたことを物語っています。

(1998年5月号に掲載)

# 赤坂八幡神社本殿

## 吹き放しの拜殿を備える

JR備後赤坂駅から国道2号を横切り少し進むと、近世に上方と西国の各地を結んだ旧山陽道に当たります。この道を西方向に約500m歩くと、道端に自然石がで作られた大きな石灯籠があり、ここを右に折れば、小高い所に赤坂八幡神社が見えてきます。

この神社は相当古くから祀られていたようで、承和年間(834年~848年)創祀と伝えられています。

(沿革については、地元で建てられた境内の説明板に書かれていますので省



▲赤坂八幡神社本殿

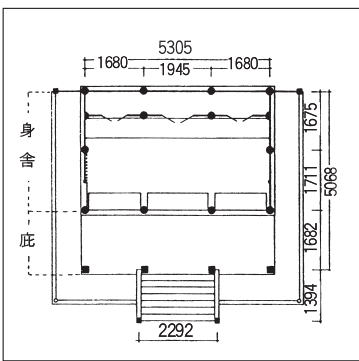


▶身舎と庇をつなぐ海老虹梁

略します。)

さて、現在の本殿は、旧屋根の上に茅葺の仮屋根を載せ、それを鉄板で覆っているため外観は異様に見えますが、これを取り除けば柿葺または檜皮葺の均整のとれた屋根が現れるでしょう。

この建物は、その前面に吹き放しの拜殿機能を持った前室を有する、芸備地方に比較的多い三間社流造です。身舎(社殿などの中心となる部分)は丸柱を用い、庇部分には定法どおり角柱を使っていますが、この角柱4本をつなぐ貫が直線的で古い形を残しています。身舎と庇部分をつなぐ梁(海老虹梁)に彫られている渦巻形の彫刻のデザインは単純で、彫りも細く、浅く造られています。また、細部の意

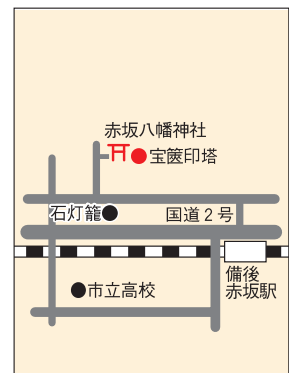


本殿平面図

匠や木組みも優れており、組物などは極彩色が施されています。このことから、立派で美しい建物であったことがうかがえます。

これらを総合的に検討すれば、この本殿は、17世紀後半に建てられたものと考えられ、吹き放しの拜殿機能を合わせ持った様式の代表例の一つと言えるでしょう。

この神社の東側の丘の中腹には、神社方向に向いた宝篋印塔が建てられています。この石塔は、相輪の形状と全体の均整が程よく整った美しい塔です。文字は彫られていませんが、南北朝時代のもので考えられ、市重要文化財に指定されています。石塔と神社には何か関係がありそうですが、現在のところ分かっていません。



(1998年11月号に掲載)

## いろは丸展示館 港に似合う白壁の蔵

鞆港のバス停から港を見ると、海際に連なる家並の中にひとときわ目立つ白壁の土蔵があります。いろは丸展示館です。

いろは丸展示館は、船着場の正面に屋根の妻を見せて建つ2階建ての土蔵で、鞆の町では「大蔵」と呼ばれています。

この建物は、「日本はきもの博物館 コーヒーハウス」「福山市福寿会館」に次いで、1997年9月3日に市内で3番目に国の登録有形文化財となったもので、江戸時代末期（推定 文化



バス停から見た館周辺

年間1804〜1818年）に建てられたものです。

鞆の津は古くから船の碇泊地、潮待ちの港として栄えていました。江戸時代には、瀬戸内の中継港として米やその他の物資を運ぶ海上運輸の要衝となり、近年まで繁栄を続けました。こうした鞆の繁栄を知る象徴的なものとして大波止や雁木・常夜燈などの港湾施設や建物を今も見るができます。

いろは丸展示館の建物はおもに物資（米・保命酒など）の保管に使われていました。構造は切妻造、2階建本瓦葺で妻が正面となります。妻の中央と両脇をなまこ壁とし、間口9.84m、奥行き21.45m、軒高6m、棟高9m、建築面積211㎡です。階下は正面腰に下見板を張り、二枚引板戸で1間の



柵屋の龍馬隠れ家を模した展示

出入口を設けています。正面左右に木製格子の明り窓が2か所、階上は中央に鉄製格子の窓1か所があり、窓の上に小庇を付けるなど、正面の意匠はよく整っています。

当時、活躍したこの建物も、その後は建設業者の作業場にあてられたり建材保管場所や貸倉庫として使われたりしました。

現在、1階では、幕末に鞆沖で紀州藩船と衝突、沈没した「龍馬率いる海援隊のいろは丸」についての展示（海中より引き揚げられた遺物）がされており、2階には、坂本龍馬が宿泊した柵屋の隠れ家が再現されています。また、この建物は常夜燈や雁木など港の風景とよく調和し、映画のロケの背景として使われることもあります。



（1999年6月号に掲載）